

2025

Republic of Korea

文部科学省委託 令和7年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指して、アジア太平洋地域の人々と協働しながら、教育と文化の分野における地域協力・交流活動を推進しています。

日本と韓国間の国際交流事業は、ユネスコの信託基金をもとに、2001年に実施された「韓国教職員招へいプログラム」に始まります。これを契機に、2003年からは日本教職員の韓国への派遣プログラムが開始されました。その後、国際連合大学が主催した「国際教育交流事業」を経て、2018年からは文部科学省委託事業「初等中等教職員国際交流事業」として継続し、これまでに3,300名以上の日韓の教職員が相互に訪問を重ねてきました。

今年度は、文部科学省委託「令和7年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業」の一環として、「韓国政府日本教職員招へいプログラム」を、2025年7月に韓国の済州島での対面プログラム及び事前・事後のオンラインプログラムの組み合わせにより実施しました。

参加教職員は、済州島内の学校や教育・文化施設の訪問を通して、韓国の教育の現状と課題を学ぶとともに、日韓両国に共通する教育課題や相違点への理解を深めました。また、韓国の教職員及び児童・生徒との交流を通じて、相互理解の促進と人的ネットワーク形成の貴重な機会となりました。本プログラムで得られた学びとつながりが、今後の日韓の教職員・学校間交流のさらなる発展につながることを期待します。

最後に、このプログラムにご支援とご協力を賜りました韓国教育部、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2026年2月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目次

1. プログラム概要.....	3
2. 参加者による訪問記録.....	6
3. 参加者の声.....	3 4
4. プログラム参加後の取組.....	3 8
5. 資料編.....	4 3

1. プログラム概要

1. 初等中等教職員国際交流事業について

ACCU はアジア太平洋地域の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う子どもたちを育む「教職員」を対象とした国際交流事業を、2001 年から日本政府の協力を得て開始しました。これまでに、日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で、4,500 人以上の海外教職員を日本に招へいし、また 1,300 人以上の教職員を海外に派遣してきました。その結果、教職員の学びが多くの子供・教職員・地域住民に還元され、さらにこの事業をきっかけに多くの学校間の国際交流が生まれ、各国間の相互理解と友好の促進に寄与しています。

日本と韓国間の国際交流事業は、ユネスコの信託基金を基に、2001 年から韓国の教職員を日本へ招へいする「韓国教職員招へいプログラム」が実施され、また 2003 年からは日本の教職員を韓国に派遣するプログラムが文部科学省及び国際連合大学の協力のもとで行われました。これらの活動は韓国政府から高く評価され、2005 年からは韓国教育部の協力のもと、韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU) によって「ユネスコ日韓教職員対話プログラム」の一環として、「韓国政府日本教職員招へいプログラム」が実施されています。

本プログラムは、「『あたらしい』学び」や「新時代に求められる教職員像」をテーマに、「異文化を通して学ぶ」こと、そして「『出会い』から学ぶ」ことを大きな特徴としています。これらの学びを通して、これからの教育の在り方を問い直し、協創のヒントを見つける機会を提供します。

2. 目的

- (1) 東アジア地域の平和の文化に貢献すること
- (2) 韓国と日本の教育制度、環境、文化についての相互理解を深めること
- (3) 多様な文化が尊重される、平和で持続可能な社会を築くために、参加者がチェンジメーカーとして必要な資質と能力を培うこと
- (4) 国際的な教育交流を通じて、将来の教育における新たな課題を検討し、その対策を講じること
- (5) 韓国と日本の学校及び教育者間のネットワークと協力を強化すること

3. 活動内容

- (1) 韓国の教育事情に関する講義の受講
- (2) 学校等の教育機関及び教育・文化施設への訪問
- (3) 韓国の教職員及び児童・生徒との交流・意見交換
- (4) 一般家庭への訪問と交流
- (5) 現地滞在前後のオリエンテーション及びリフレクション

4. 日程

日付	場所 (形式)	活動	
		グループ A	グループ B
6月28日(土)	オンライン	第1回事前オリエンテーション (ACCU 主催)	
7月4日(金)	オンライン	第2回事前オリエンテーション (KNCU 主催)	
7月13日(日)	和歌山県	出発前オリエンテーション	
7月14日(月)	大阪府 韓国済州島	出国 (関西国際空港→済州国際空港) 開会式・歓迎夕食会	
7月15日(火)	韓国済州島	Samsung Girls' High School (サムスン女子高等学校) 訪問 Kkumkiolla Career Experience Center (クムキ オレ進路職業体験センター) 訪問	Pyoseon High School (ピョン ソン高等学校) 訪問 Jeju Multicultural Education Center (済州多文化教育センタ ー) 訪問
7月16日(水)	韓国済州島	Bomok Elementary School (ポモク小学校) 訪問 Seogwipo Student Culture Center (西帰浦学生文化院) 訪問 ホームビジット	Inhwa Elementary School (イ ンファ小学校) 訪問 Jeju Institute of Convergence Science & Research (済州融合 科学研究院) 訪問 ホームビジット
7月17日(木)	韓国済州島	Seongsan Ilchulbong (城山日出峰) 訪問 Jeju World Natural Heritage Center (済州世界自然遺産センタ ー) 訪問 Jeju 4.3 Memorial Hall (済州 4.3 平和記念館) 訪問	
7月18日(金)	韓国済州島	A・B グループ間共有セッション 日韓教師対話 25 周年記念教師フォーラム	
7月19日(土)	韓国済州島	日韓教師対話 25 周年記念教師フォーラム 済州海女博物館見学	
7月20日(日)	韓国済州島 大阪府	フォローアップアクションプランの発表及び閉会式 帰国 (済州国際空港→関西国際空港)	
8月26日(火)	オンライン	第1回フォローアップミーティング (ACCU 主催)	
2026年 2月7日(土)	オンライン	第2回フォローアップミーティング (ACCU 主催)	

5. 参加者

下記の教職員、随行員の計 60 名程度の参加とする。

- ・公募により選抜された初等中等教職員または教育行政職員
- ・文部科学省、ACCU の職員

6. 参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 応募時に有効なパスポートを所有していること。(入国時に 6 か月以上有効なパスポートであること。)
- (3) 所属する機関の長(教育長・学校長等)から推薦を受けた、初等中等教職員または教育行政職員であること。
- (4) 健康かつオンラインを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) プログラムに対する目的意識を強く持ち、プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- (6) プログラムで得た学びや知見を帰国後に児童・生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
- (7) プログラムの趣旨を理解し、将来にわたり韓国との教育交流の推進に寄与できること。
- (8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。
- (9) 習慣や文化の異なる国との交流であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
- (10) Eメールや LINE を用いて円滑に連絡ができ、また Microsoft Word/Excel/PowerPoint を使用できること。
- (11) オンラインセッション参加のために必要な PC、通信環境を準備できること。
- (12) 滞在中の記録のために必要なスマートフォン、カメラ等を準備できること。
- (13) 出発前オリエンテーション(日本国内)から韓国の現地、日本帰国に至るまで、参加者負担によるポケット Wi-Fi や SIM カード、e-SIM 等により、携帯電話やスマートフォンなどの通信環境を整え、Eメールや LINE 等で常に連絡が取り合える状況でいられること。
- (14) 主催者や実施運営団体の指定する報告書やアクションプランなどを提出できること。

2. 参加者による訪問記録

参加者による訪問記録をもとに、一部編集・抜粋して掲載します。

オリエンテーション

6月28日(土) 第1回事前オリエンテーション (ACCU主催)

活動内容

- ・開会挨拶
- ・韓国の教育事情に関する講義
- ・派遣プログラム説明・案内 (ACCU)
- ・過去の参加者による経験談・アドバイス
- ・参加者間の自己紹介
- ・文化授業に関する打ち合わせ
- ・質疑応答



所感①

韓国の教育事情に関する講義

韓国の教育制度の学校系統図は大きくは日本の教育制度と差はないところと、高校・大学入試制度や兵役、教員の働く意識や社会的ステイタスには似て非なる面があります。また、教育課程も6年ごとの改訂があり、2022年公示では、「言語」、「数理能力」、「デジタル素養」の三つが重点的に掲げられています。また外国からの移民や脱北者の受入れなど、多文化に親和的な環境作りと、協力的なコミュニケーション力が求められている社会環境にあります。

教師は人気の職業のトップにあり、特に国家公務員である教員は女性にとってもステイタスのある、働きやすい職業イメージがあります。

昨年度の参加者からの貴重な体験報告もあり、とても参考になりました。また、各セッションでは、参加者同士の自己紹介や打ち合わせ、質疑など活発な意見交換が行われ、派遣の準備が徐々に整った感があります。

所感②

韓国の教育事情の講義では、少子化が進んでいること等、共通する部分も多かったのですが、教員を志している子ども達がたくさんいることが素晴らしいと思いました。その理由として、教員の福利厚生がしっかりしていること、定時で退勤できることなど、日本の教員不足の解消の鍵となる取組があるのではないかと感じました。

また、韓国の小学生の8割が外国にルーツを持っていることにも驚きました。日本も近い将来に直面する課題として国際交流はとても重要な課題だと認識しました。多文化家庭の子ども達の受け入れ態勢や、子ども達の多様性を認め合う姿はどのようなものなのかを現地でしっかりと学びたいと感じました。

昨年度の参加者の経験談やアドバイスもとてもありがたかったです。文化授業の様子やホームビジットの様子を拝見し、ビジョンを明確にすることができました。参加者のとても充実したプログラムの様子を拝見し、私も人生を豊かにする体験ができるように励んでいきたいと改めて思いました。

今後のオリエンテーションを含め、万全の体制で臨みたいです。

7月4日(金) 第2回事前オリエンテーション (KNCU 主催)

活動内容

- ・ 歓迎の挨拶
- ・ ユネスコと「日韓教師対話：2025 日本教職員韓国招へい研修」(韓国ユネスコ国内委員会)
- ・ 韓国の教育制度と主要課題 (韓国教育部)
- ・ 平和の島、済州と済州の教育 (済州特別自治道教育庁)
- ・ 韓国の教育に関する自由な質疑応答
- ・ 今後の日程及び準備事項の案内 (韓国ユネスコ国内委員会)

所感

①韓国の教育事情、教育制度について

韓国の教育事情、教育制度を丁寧に教えていただき、日本と似ている部分も多い(6・3・3制など)半面、日本にはない制度(ヌルボム学校、放課後プログラム、AI デジタル教科書)もあり、現地での様子を知りたいという想いをより強くすることができた。

②済州島の教育について

済州島の教育について、済州特別自治道教育庁の方よりお話をいただき、自然豊かで教育にも大変力を入れている地であることがよくわかりました。ユネスコ三冠に輝いていたり、固有の文化が根付く島であることなど教えてもらい、本プログラムを通して教育面以外の面でも済州島のことを知って帰ろうという想いをもつことができた。そして、何より担当者が大変熱く済州の教育について語ってくださり、その熱意が伝わった。大変素晴らしいことをしている場であることが伝わり、学校を見るのがより一層楽しみになった。

③受入れスタッフの方々の歓迎の念

KNCU スタッフ、受入れ校の代表者、全ての方が大変好意的で、訪問を歓迎してくれていることが画面越しにも伝わってきた。大変ありがたいことであると同時に、日韓の交流のためにより交流にしなければならないという責任を感じた。

7月13日(日) 出発前オリエンテーション

活動内容

- ・プログラム確認事項・注意事項
- ・文化授業の打ち合わせ
- ・サブグループ間での自己紹介
- ・出し物の打ち合わせ・練習

所感

この日、プログラムに参加する韓国に関心を寄せ、教育機関及び歴史・文化を学びたいと考える日本の教職員に初対面し、いよいよプログラムが始まるという高揚感とともに求められる期待に応えたいという責任感を強く感じました。プログラム参加者に選出いただいた感謝と日本を代表して参加させていただき責任を持って全工程において積極的に学び吸収したいと考えました。

7月14日(月) 開会式・歓迎夕食会

活動内容

18:00	開会式 濟州島の教育を紹介する動画を視聴、歓迎挨拶、団長の答辞、記念品交換、記念写真撮影、乾杯の挨拶
19:00	夕食開始
20:00	感謝の気持ちの分かち合い：出し物（八月踊り） 奄美大島が世界遺産であること、濟州島と奄美大島の共通点等を韓国語で紹介しました。振り付けのレクチャーが行われた後、全員で輪になり八月踊りを踊りました。着物や法被を着て参加した日本側の参加者もあり、日本文化を一緒に楽しむことができました。

所感①

オリエンテーションでは参加者が快適に過ごせるよう細やかなお気遣いをいただき、歓迎してくださっていることを感じました。

開会式では、今年は日韓国交正常化 60 周年、濟州島「世界平和の島」宣言 20 周年、日韓教職員交流プログラム 25 周年という節目の年であるということも多くの方々からお話しいただき、そのような記念すべき年に本プログラムに参加できることを大変ありがたく、また責任感を持って臨むべきだということを感じました。また、多くの方々から日韓交流のご経験をお話しいただき、本プログラムがこれまで多くの方々のご尽力により継続されていることを実感しました。そのような交流の輪に自分も参加できることを光栄に感じ、自分も本プログラムで得たものを多くの人に伝え、交流の輪を広げるお手伝いをしていきたいと思いました。

食事の際には韓国の先生方とお話しをしました。翻訳アプリを使いながら準備していた質問などをしてコミュニケーションを取ることができましたが、もっと韓国語の勉強をしてあげればよかったとも思いました。

会の最後には参加者全員で八月踊りを踊り、日韓の参加者の一体感を感じることができました。残りの期間で、多くの先生方と積極的に交流し学びを深めたいと強く感じました。

所感②

日韓国交正常化 60 周年、そして 2001 年から始まった日韓教職員交流プログラム 25 周年という節目の年に、本プログラムに参加することができることは大変光栄なことであると感じました。

開会式において韓国関係機関のみなさまからの温かい歓迎を受け、25 年間続けられてきた日韓教職員交流プログラムのこれまでの経緯をお聞きする中で、人と自然が共生し、平和を象徴する自然豊かな済州島でプログラムに参加できるということを再認識し、これから始まる 7 日間の研修に向けての気持ちが高まりました。

また消滅危機言語に分類されている済州語で詩を朗読していただき、言語や方言というのはそれを話す人々のアイデンティティを形成していく際に重要な役割を果たすため、文化を存続させ、守っていくためには言語も大切に扱っていくことが必要だと感じました。

開会式の最後に参加者全員で八月踊りを踊りました。全員で大きな輪になって踊ったので、みなさんの明るい笑顔を見ながら踊ることができました。一体感を感じる瞬間でした。



学校訪問

7月15日(火) 【Aグループ】 サムソン女子高等学校

活動内容

9:00～9:20	図書館にて歓迎イベント スクールバンドの演奏、校長の歓迎挨拶、日本教職員団長挨拶、教務部長から学校紹介、生徒が作成した学校紹介動画視聴
9:20～10:10	授業見学 和菓子作り、マルチスプレー作り、椿オイルシャンプー作り、オメガ餅作り、クッキーとレンガのケーキを作る、漢陽大学との融合授業
10:10～10:20	休憩
10:20～11:10	日本教職員による文化授業
11:10～11:20	休憩
11:20～11:40	学校施設見学
11:40～12:20	学食にて昼食・休憩
12:20～13:20	文化交流：日韓茶道文化の比較体験会
13:20～13:30	休憩
13:30～14:00	質疑応答及びコミュニケーション・記念撮影

所感

サムソン女子高等学校の訪問では、海外の学校で教えるという貴重な体験ができました。日本の文化に興味を持ってくれたことがとても嬉しかったです。当日、私の班には誕生日の先生がいたのですが、クラス全員で歌を歌って祝ってくれました。授業終わりに特別授業で作ったお菓子やオイルシャンプーを私たちにプレゼントしてくれました。

また、済州の文化を題材にした特別授業を見学しました。異文化を理解するためには、自己理解と他者理解が不可欠であり、共感や違いを受け入れる多様な視点が必要だと感じました。まずは、自分の住んでいる地域の良さを再認識し、自分自身を見つめ直すことが大切だと改めて思いました。

施設を見学中、学校の現状について教えていただきました。できるだけ分業することによって生徒との時間をより多く捻出するようにしていること、夏休み中も生徒の学習を継続できる環境があること、生徒が主体的に自ら選んで勉強できる環境があることに感動しました。また教育課程上も生徒にたくさんの選択肢があり、保護者に対しても説明会を頻繁に行い、生徒の進路実現に力を入れていることに感銘を受けました。

韓国のお茶文化も学ぶことができ大変有意義な時間になりました。

7月15日(火) 【Bグループ】 ピョソン高校

活動内容

9:00～10:00	歓迎レセプション及び学校紹介 オーケストラの公演、校長の歓迎の挨拶、日本教職員代表の挨拶、記念品交換、学校紹介
10:00～11:00	授業参観 IBプログラムの探究的な活動に関する1年生の発表、模擬国連発表
11:10～12:10	教職員懇談会 授業事例発表、質疑応答
12:10～13:00	昼食
13:00～14:00	教職員懇談会 国際バカロレア (IB) カリキュラムと CAS (Creativity, Activity, Service) 事例発表、質疑応答

所感

IB スクールの学校を初めて参観し、生徒が主体的に学ぶ姿が印象的でした。日本と同様に韓国でも教員から生徒へ一方的に教える教育から、生徒が主体的に学ぶ教育へと変化をしているという社会的な背景を基に教育変革が行われているのだと知りました。ピョソン高校では、学校内に21時まで勉強できる場所や実験、お互いに学び合う環境など生徒の学びをサポートし、生徒が自走する力を様々な角度から育てているのだと知りました。また、生徒が探究的な活動で学んだことを発表する場面では、生徒が各教科で学んだことや、その土地に生活していて課題だと感じていることを踏まえながら地域の課題の解決に向けてどのような取組をしたのか、分かりやすく説明してくれました。模擬国連の発表では、実際に模擬国連を行ってみて、その土地の立場から話をしなければならないことやその土地の様々な資料を読み解くことが難しかったと話していました。他国の考え方や価値観などを知ることができるのは、国際交流だけだと感じていましたが、模擬国連などを行うことにより、自分自身が実感を持って他国の考え方や価値観を知ることができるのだと大きな学びになりました。



7月16日(水) 【Aグループ】 ポモク小学校

活動内容

9:00～10:00	体育館にて歓迎会 児童による音楽公演（2年生：NANTA、3～4年生：オカリナ）、来賓紹介、ポモク小学校の教職員紹介、校長挨拶、日本教職員代表挨拶、校長による学校紹介
10:00～10:20	2グループに分かれて学校見学
10:50～11:30	日本教職員による文化授業①（1年生～6年生）
11:40～12:20	1・2年生担当の日本教職員は給食室にて昼食 3～6年生 文化授業②
12:25～13:05	3～6年生担当の日本教職員は給食室にて昼食 1・2年生 文化授業②
13:05～13:10	学校校庭にて記念撮影
13:10～14:00	バスでグドゥミ浦地域に移動し、小天地地域で校長の案内でトレッキング、漁港のカフェで休憩と歓談

所感

IB校として、校長先生の明確なリーダーシップのもと、独自の様々な学習活動に意欲的に取り組まれていて、同じ公立の小学校でも日本との大きな違いを感じました。日本でも教職員がアンテナを高くし、グローバルに視野を広げて、教育活動を計画していく必要があると思いました。

潤沢な教育予算のおかげで、児童の学習環境や教員の仕事環境が日本の公立学校より整っていました。さらに、校長先生が応募することにより追加で教育予算をもらえると聞き、校長先生の裁量で学校の学習内容や環境がどんどん向上していくのはすばらしいと思いました。

教員の働き方改革が韓国は進んでいて、担任教諭の業務負担をゼロにする政策を実施されており、事務専任チームが構成されていることに驚きました。教員が授業に専念でき、子どもに向き合う時間が確保されていたのは、教員として理想的な働き方だと思いました。教務と業務をしっかりと分けることで、教員の人材確保にもつながると思います。

保護者への教育費や育児負担の軽減にも取り組んでおり、学童保育やスポーツクラブ活動など、地域の人材や専門家の力を生かして保護者のニーズを満たしているところも、日本の学校で取り入れていけないのではないかと感じました。

国際交流を積極的に行っていきたいポモク小学校とこれからも交流を深め、お互いがよい刺激を与えあえる関係を築いていきたいと思います。

7月16日(水) 【Bグループ】 インファ小学校

活動内容

9:20～9:40	歓迎会 校長の挨拶、児童代表の歓迎の挨拶、学校紹介、日本教職員代表の挨拶、記念撮影
9:40～10:20	学校見学 各学級、保健室、we ルーム（カウンセリング教室）、音楽室、体育館、校庭、併設幼稚園
10:40～11:50	日本教職員による授業
11:55～12:20	昼食
12:20～12:40	休憩（自由見学）
12:40～13:30	質疑応答及び日韓教職員懇談会 基礎学力研究学校の紹介

所感

日本と韓国の学校制度の違い

①給食指導・清掃指導・学校施設

韓国の学校では給食指導、清掃指導がない。特に昼食時は、ランチルームで給食室の方から盛られた食事を受け取り、そのまま、いただきます等もなく各自で食べ、食べられなかったものは残す。教員の負担軽減になっている反面、残食の多さを感じた。先生方も残食の多さを気にしており、残食を減らす取組（残食の量によるポイントを見える化する機械の導入）をしているが、日本のような給食指導はない。日本の場合、給食指導により給食に苦手意識を持つ生徒がいるのも事実である。韓国のような昼食のあり方を教員側が知った上で給食指導に当たることは大切であると感じた。

また、韓国の子どもたちはよく食べる。給食の量も日本とは比べ物にならないほど多い。給食費も一食 550 円と日本の 1.5～2 倍近く。キムチや野菜は食べ放題である。授業で日本の給食の写真を見せたときに「これだけ？」というリアクションもあった。

韓国では高校まで給食費が無料であり、子どもの時からよく食べる影響か、街中で出会った韓国人は背格好がよい人が多いと感じた。幼少期の給食の影響も大きいのではないかと感じた。

また、清掃指導がない分、業者による清掃が入っており、学校はどこも大変きれいであった。また、学校施設も日本と比べ大変設備がきれいで新しいと感じた。（体育館は済州島で一番古いと言われたが、大変きれいな印象を受けた。）

総合的に日本と比べて韓国が教育にお金を使っていることを感じた。

②分業制

保健室の先生、栄養教諭、図書館の先生、カウンセリングの先生など担任（授業専科）以外の多様な先生による授業が行われている。先の①のように、清掃は業者、給食は給食の事務員など教員は授業に専念できる環境が整っていると感じた。

生徒は放課後、学校の目の前の飲食店で買い食いをし、そのまま学校に戻ってくる様子もあり、日本のような生徒指導がないことにカルチャーショックを受けた。日本で一般的な「生徒指導」が、物理的には一番近い国である韓国でさえも行われていないことを受け、「生徒指導とは？」と日本の当たり前を再考察するきっかけとなった。

しかし、その反面、放課後プログラムや延長保育などもあり、事前の韓国教育の情報以上に、日本同様の長時間労働の様相が見受けられた。

今回、私たちの受入れに尽力して下さった先生をはじめ、インファ小学校の先生方は、一般の公立学校の先生とは思えないほど大変教育熱心な先生方が多く、大変温かく、そして準備を重ねて私たちを受け入れて下さった。一般の公立学校でここまでやってくださることに感謝の想いを抱いた。



教育・文化施設訪問

7月15日(火) 【Aグループ】 クムキオレ進路職業体験センター

活動内容

14:40～15:00	記念撮影、来賓紹介（教育長・西帰浦市長） センター説明（XRやAIを駆使した未来型の体験センターである） ・主に济州島の学生が進路体験できるようになっているが、韓国全国から修学旅行などでも訪れることがある。 ・31の企業が協働作業を行っている。 ・センター内で1年に一つのテーマを選択して12月に発表を行っている。2024年は「生徒の健康について」のテーマで朝に縄跳び活動を行うようにしていた。その成果を縄跳び大会で披露するようにした。 ・国際交流も活発に行っている。日本の京都・神戸・奈良を訪れた。
15:00～16:00	センター内見学 「VRゴーグルを着用した恐竜接近体験」 ・リアルな肉食恐竜が目の前まで接近し、攻撃的に接するか優しく接するかで、カウンセリングの材料になる。 ・デジタルゲーム形式で職業に関する質問に答えていく。自分の特性を知り、おすすめの仕事を紹介してくれた。ちなみに私の適正職業は、教員・心理カウンセラー・通訳者だった。
16:00	お土産をいただき、屋上の展望スペースを見学し、終了。

所感

将来の具体的な夢が全く描けない子ども達にとっては、どんな職業の選択肢があって自分の強みは何かを理解させてくれるとても心強い体験だと感じました。

私自身、小学生の頃を思い出してみると、身近に感じることでできた職種（教員、看護師、店員、調理師、農家など）でしか選択肢がなかったように思います。このような体験施設を小学生、中学生の頃に訪れることができたら、わくわくした夢が広がるよい経験ができたと思います。

また、「〇〇になりたい」という強い思いをもった子どもに対しても有意義な施設だと思いました。例えば、医者になりたいと考えている子どもは、どんな適正が必要なのか、どのように進路決定をしていけば自分らしく夢に近づけるのかを知ることができます。それはとても心強いものとなるはずです。

そして何より、堅苦しい場所ではなく現代の子どもたちが楽しめる施設環境であることが大切だと感じました。無理なく、子どもの可能性を引き出していける未来に先駆けた施設だと思いました。

日本も、もっと教育に予算を割り当て、所得格差をなくし、どの子どもも同じように体験チャンスがあり、一人ひとりの可能性を最大限に引き出していけるような変革を期待しています。

7月15日(火) 【Bグループ】 済州多文化教育センター

活動内容

15:00～15:10	センター長からの歓迎の挨拶
15:10～15:40	機関の紹介及び質疑応答
15:30～16:30	<p>施設見学及び多文化教育講師との懇談会</p> <p>【懇談会】</p> <ul style="list-style-type: none">・2010年から韓国に移住している日本人の講師と懇談。現在は、日本文化を伝える講師を務めていらっしゃる。・日本人は100%自分の中で話す内容が準備できたところで発言するが、韓国の児童は異なり、思ったこと、感じたことをそのまま発言する傾向が強い。・経済の発展とともに、より豊かな生活を求めている背景があり、受験熱の高まりや勉強への意欲・関心が強い。・家族が教育について、様々な意見を学校側に伝えることが非常に多い。以前は個人の電話番号等を教えていたが、今はアプリでやり取りをするのみとなっている。・移住者は、ベトナム、フィリピン、中国等が多い。学級だより等で脱北者向けに書かれている内容もあるため、気が付いていないだけで、多いのかもしれない。 <p>【施設見学】</p> <ul style="list-style-type: none">・元々、小学校だった施設を利用していた。そのため、図書館や給食（調理室）、VR体験の部屋、民族衣装など、様々な国の文化体験ができる環境が多く整っていた。・多くの資源は寄付ではなく、この施設の予算で成り立っているようで、この施設運営に協賛してくれている企業がいるため、運営が成り立っているようだった。

所感

今回の訪問を通じて、済州地域における多文化教育の先進的な取組に触れることができました。特に、支援の主対象である、外国にルーツのある子どもだけでなく、多文化理解・共生社会という視点で関わっている点に感銘を受けました。

施設見学では、異文化を「知る」、「触れる」、「尊重する」ことが自然と行えるようにデザインされた環境が印象的で、児童・生徒が日常的に異文化への理解を深められるよう工夫されていました。懇談会では、日本文化を教える日本人の講師から貴重なお話を伺いました。

日本では、多文化教育はまだ「特別な支援」として捉えられがちですが、韓国のように「社会全体の共通の教育課題」として日常的な実践に組み込む視点は、今後の日本の教育現場に取り入れていくべき姿勢だと感じました。

この訪問を通じて、多様性を受け入れるためには制度だけでなく、文化的背景の理解と対話を通じた教育者の姿勢が不可欠であることを再確認しました。今後、自校や地域においても、多文化に対する感受性や理解を高める教育を模索していきたいと感じました。

7月16日(水) 【Bグループ】 済州融合科学研究院

活動内容

14:30～14:40	施設紹介 所長より機関の紹介をしていただきました。
14:40～15:00	研究施設の見学 研究員や高校生が使用する実験器具や機械を見せていただきました。どの機材も1000万～3000万円の高額な最先端の物が導入されていました。
15:00～15:30	科学館の見学 科学館は1階が化学、物理に関する展示や体験、2階は数学や生命科学、地球科学に関する展示や体験、3階は宇宙やロボット、エネルギーに関する展示や体験コーナーがありました。専門家の科学を子どもたちに分かりやすく楽しく伝えるためにはどうしたらよいかという視点に基づいて作られていました。特別にロボットダンスもを見せていただきました。

所感

韓国の科学技術の発展速度の速さに驚きました。この背景には、韓国国民の教育への熱心さと、政府がきちんと教育にお金をかける仕組みにあるのではないかと思います。

本施設に限らず、他の教育機関でも、施設の設備投資や人員の配置に日本以上に手厚くお金をかけていると感じました。また、施設の作り方も合理的で、科学技術高校と科学館、科学研究院を併設することで、高い機材の購入も1つで済むため、別々の機関で別々の物を購入するよりコストが抑えられ、よりよい機材が購入できるのではと思いました。高校生への指導も学校の教員だけでなく、現場で実際に働く研究員の方にもしていただけるため、より専門的なことが学べると感じました。さらに、研究員の働き方を見たり、話をしたりする中で、自分の進路を考える上での手助けにもなり、キャリア教育の面からみても素晴らしい仕組みだなと感じました。

自身の所属校は1年半後に校舎を大学の敷地内に移転します。そのため、高大連携を強化し、本施設のようにコスト面、人員面でも協力しながら、うまく連携を図っていきたいです。

7月16日(水) 【Aグループ】 西帰浦学生文化院

活動内容

14:40～15:00	院長より西帰浦学生文化院の活動紹介 西帰浦学生文化院の沿革、施設の説明、開設講座を紹介していただきました。人生を豊かにする文化芸術、自然の中のふれあい教育という運営目標のもと、様々な文化芸術に触れることができる講座や、文化芸術の才能を育てる講座、自然とふれあえる講座を運営し、学校外の地域社会での教育活動の重要性についてお話していただきました。
15:10～15:55	夢をかなえるカリグラフィー教室 カリグラフィーとは手で書く感性的な文字であり、感性を入れて書くとはどういうことかを教えていただきました。また、ハングルは線でできているという特徴から、線をきれいに書くことでハングルのきれいに書くことができるということで、様々な直線や曲線を書く練習をしました。その後、うちに自分の名前のハングルの感性を込めて書き、作品を作りました。講師の素敵なハングルに感化され、それぞれの名前をハングルで自分らしく表現することを楽しみました。
15:55～16:10	施設見学 演劇公演が行われたばかりの大講堂や、伝統舞踊の教室が行われる伝統文化室、バンドや管弦楽の教室が行われる映像音楽室、伝統楽器やK-POPダンスなどの教室が行われる律動室など施設内を案内していただきました。案内の道すがらにある芸術作品にも感動しながら、施設内で行われる様々な芸術教育に感心していました。

所感

芸術活動にはお金がかかるため、全ての人が平等に教育を受けられるとは限らないが、公共の組織により教室が開かれることで、多くの人々が芸術に触れて、その才能を開花させることができるということが分かりました。その点で、地域社会の教育への関わり方の一つとして文化芸術や自然環境教育を地域が担っていることに感心しました。現在の日本では部活動の地域移行が徐々に行われていますが、その運営について担い手不足や責任の所在など新たな問題点が出てきています。その点を考えると、地域教育の形としてこうした施設や拠点があることは良いのではないかと考えました。



7月17日(木) 城山日出峰・濟州世界自然遺産センター

活動内容

9:00～10:00	城山日出峰 自由散策 韓国で最初の自然遺産に指定され、2007年に「濟州火山島と溶岩洞窟群」の構成資産としてユネスコ世界自然遺産に登録されました。
11:00～12:00	濟州世界自然遺産センター訪問 2012年9月に開館した、濟州島におけるユネスコ世界自然遺産を総合的に紹介する専門施設です。 濟州火山島と溶岩洞窟群の形成過程や地質構造、地形等を常設展示と4D立体映像館でわかりやすく体験することができました。特に、映像体験では、濟州の誕生、漢拏山四季、溶岩洞窟の神秘などを臨場感溢れる映像やシミュレーション等を4Dで学ぶことができ、視覚的にも知的にも老若男女問わず楽しめる内容でした。

所感①

城山日出峰では、実際に歩くことで、教科書だけでは伝えきれない火山地形のスケールや成り立ちを体感できました。濟州の自然が数十万年にわたる地球の活動によって形成されてきたという地質的事実は、理科や社会科教育に直結する貴重な学びに繋がると感じました。

また、自然と人の営みの関わりを考える上でも有意義で、児童・生徒に環境保全や世界遺産の重要性を伝える教材として活用できると感じました。

濟州世界自然遺産センターでは、映像や展示を通して、濟州火山島の形成や火山活動、溶岩洞窟の特徴を多角的に学ぶことができました。特に4D映像は、視覚・聴覚に訴える教育効果が高く、理科や総合学習における地球科学の導入として非常に有効だと感じました。それだけでなく、一教育施設にこのような大掛かりな機材があることから、韓国での教育への関心の高さを感じました。

所感②

城山日出峰を登頂し、自然の壮大さを体感できました。座学では得られない学びであると感じました。登頂後の景色を見て濟州は海と自然に囲まれた美しい島で、緑豊かな山々と透明度の高い海、さらに滝や溪谷が点在しており、島全体の自然の美しさが魅力であると再認識できました。

濟州世界自然遺産センターでは、4D映像館で島が誕生する過程を楽しみながら学び、溶岩洞窟を再現した施設を歩き、濟州島の形成について理解を深めることができました。歴史のある島なので、文化のことも学びたいと興味・関心が大きくなりました。

7月17日(木) 濟州 4.3 平和記念館

活動内容

13:30～14:00	ホールで濟州 4.3 事件についての資料映像を見ました。濟州 4.3 事件の経緯やこれまでの韓国内での扱われ方、現在の平和につながる活動などが解説されていました。参加者はメモを取りながら真剣に映像を視聴していました。
14:00～15:30	スタッフの案内で館内の展示を見て回りました。濟州 4.3 事件当時の資料や多くの島民が犠牲になった様子が映像などで展示されていました。特に映像資料ではアニメーションなどを用い、韓国語が分からない人にも理解できるような工夫がなされていました。
15:30～16:00	ホールで研究室長による質疑応答がありました。まずは、室長から濟州 4.3 平和財団が 2008 年に設立されたことや、財団の活動についての説明がありました。その後、参加者からの質問を行いました。

所感

濟州 4.3 事件は今回の事業に参加して始めて知りました。訪問前に自分なりに調べて行きましたが、実際の資料や映像を見ることで事件についての理解がより深まりました。これだけの悲惨な事件が物理的に近い日本国内では全く知られていないということに、日本と韓国の政治的、歴史的な難しさを感じました。特に、現地での展示やスタッフの方の案内の中にも「日本の植民地だった」という言葉が何度も使われていました。日本が韓国を植民地にしていたという歴史は、確かに日本国内でも学びますが、日本人の中にどれだけそのことを意識して生活している人がいるかを改めて考えさせられました。これらのことから、国際理解を深めるには、歴史を知る、文化を知ることが極めて大切だということを感じました。

7月19日(土) 濟州海女博物館

活動内容

13:00～13:50	自由見学 海女の日常生活、共同体としての生き方、海女の仕事に関する展示を見ることができました。海女は素潜り漁を職業とする女性です。濟州の海女は、海を単なる漁の場所としてではなく、共存の場として捉え、素潜りの技術や海洋知識を継承しながら、家計を支えていました。半農半漁の伝統的な生業と、互いに助け合う女性の共同体を通じて、19世紀末からは韓国国内外へと進出し、濟州の経済領域を拡大した開拓者でもあります。 海女の環境に配慮した持続可能な漁業方法や、厳しい自然の中で共に働き、危険を分かち合い、助け合う「プルットク」と呼ばれる共同の休憩場所での交流など、強い共同体意識と相互扶助の精神などが評価され、2016年にユネスコ世界無形文化遺産に登録されました。
-------------	---

14:00～15:30	<p>海女に出会うプログラム</p> <p>現役の海女さんが海女の仕事について説明してくださいました。海女さんは初級、中級、上級に分けられ、潜れる深さが決まっています。海の生き物を守るため、あわびやサザエは漁ができる期間が決まっています。最近では温暖化の影響でサザエの産卵時期が遅くなり、漁獲量も激減しているなど、海の変化を肌で感じているようです。</p>
-------------	--

所感

済州海女博物館は、単なる歴史的な展示にとどまらず、済州の海女たちがどのようにして厳しい自然と向き合い、家族やコミュニティを支えてきたかを深く理解できる場所でした。特に印象的だったのは、彼女たちの生活の厳しさと、それを乗り越える精神力、そして共同体の絆でした。単なる労働としてではなく、自然との共存の中で培われた独自の文化、世代を超えて受け継がれる技術や知識の重要性も強く感じました。

日本が植民地時代に韓国の海女の海産物を不当に安く買い叩き搾取をしていたこと、終戦後にも竹島周辺で海女が漁業を行っていたことなどを初めて知りました。日本と韓国の間では様々な歴史的な問題がありますが、詳しい内容を知らないものが多いということに気がつきました。両国間の関係をよりよくしていくためには、まずは日本人がしっかり歴史を知り、歴史を踏まえた上で、未来志向の対話をしていく必要があると感じました。現在の日本においても、現代史にはあまり触れない傾向があります。歴史認識に関するデリケートな部分や政治的配慮等の理由があるかとは思いますが、教育が正しい歴史を教えることが必要であると強く感じました。



7月16日(水) ホームビジット

※氏名は仮名です。

【A グループ】 小学校の児童のご自宅①

活動内容

16:30～16:50	韓国のりのお菓子、はちみつなどをプレゼントしていただきました。こちらからは、日本のお菓子、ご当地キャラクターのキーホルダー、扇子などをお土産としてお渡ししました。
17:00	車でご自宅近くのお店に連れて行っていただきました。濟州島の代表的なアンチョビソースと一緒にサムギョプサルをいただきました。日本と韓国のテーブルマナー、お酒の飲み方の違いについても話をしました。一緒に訪問した先生は、訪問先のご家族に午前中の文化授業のスライド資料を用いながら、桜島や伊豆諸島の説明をされていました。ご家族は熱心に耳を傾けていらっしゃいました。
19:00	車でカフェに移動し、パッピンスをいただきました。

所感

訪問先のご家族は、お二人とも濟州島出身ではありませんが、ずっと濟州島で暮らすことを考えていたようで、ご子息の学習環境、そして濟州の豊かな自然環境のため引っ越してきたそうです。「ソウルと濟州どちらが好きですか？」と質問したところ、「濟州が好き。」と答えてくださいました。

いとこの中学校1年生の生徒さんは、日本の文化が好きで、今回我々日本教職員が来るということでわざわざホームビジットに参加してくれたそうです。日本の文化や言語に興味を持ってきていること、独学で日本語を勉強して今回のホームビジットで進んで日本語で会話してくれたことに日本人として嬉しい気持ちになりました。

韓国においても、児童・生徒のスマホ使用が問題になっているそうです。小学生からスマホを所持している児童はまだそれほど多くないようですが、友人関係を構築するために買い与えているそうです。訪問先のご家庭でも子どもがスマホに依存していくことを心配されており、日本でも同じ問題を抱えていることとお話しました。

【A グループ】 小学校の先生のご自宅

活動内容

17:00～19:30	小学校の先生方の手作りの韓国家庭料理をごちそうになりました。お忙しい中、先生が中心となって料理を準備していただき、トッポギやチャプチェ、ナムル、プルコギなどの韓国料理をバイキング形式でいただき、お酒を交えながら楽しい夕食の時間になりました。夕食後は、韓国の定番のお菓子やデザートをいただきました。両国の先生方が教育制度や教員の働き方、それぞれ
-------------	---

	れに疑問に思っていることを質問し合い、情報交換をしました。韓国の先生方はどのような質問にも丁寧に答えてくださり、非常に有意義な時間になりました。同班の先生が大人用と子ども用の浴衣を日本からのお土産としてプレゼントされたので、その浴衣の着付けをしてみんなで写真を撮りました。
--	--

所感①

「日本ではトッポギが人気だと聞いたので用意しました。」と日本人の好きな食べ物を事前に調べて準備していただきました。たくさんのお土産も準備していただき、「おもてなし」の心はどの国でも同じだと感じました。

日韓関係の改善には、今回のような人と人との交流が大切だと感じました。日本と韓国は地理的にも文化的にもとても近い国なので、未来の子どもたちに向けて、日韓の大人同士がよい関係を築けるように努力していくべきだと思います。政治情勢やメディアに振り回されることなく、子どもたちのレベルから交流によって信頼関係が作れるようにしていきたいと強く感じました。

所感②

教育機関への訪問とは、また違った経験をさせていただき、大変勉強になりました。他のプログラム内でも韓国の教職員の方とお話する機会 was ありましたが、時に本音を交えながら日々の教育現場での課題や成果について情報交換できたことは本プログラムの中でも心に残る一場面になりました。

お家に招いていただき、おもてなしを受けて感じたことは、両国の文化が異なるようで似ているところが本当に多いということです。言語の壁がある中で、相手の様子をよく観察していると気遣いの仕方や、環境や食に関する配慮など相手の立場に立って考えられている場面が多くあり、異国にいる違和感を全く感じることなく楽しい時間を過ごすことができました。今後、日本で自分が他国の人をおもてなしする際には今回の経験を思い出したいと思いました。

外交レベルでは大きな課題のある日韓関係ですが、本プログラムのホームビジットのような人と人との交流が大切だと感じました。両国の教職員同士が文化交流や教育交流を重ね続けることで、日韓関係の改善につながっていくと強く感じました。

【A グループ】 小学校の児童のご自宅②

活動内容

16:45	日本からのお土産を渡しました。子どもたちにはチャンバラができる剣とけん玉を、家族には日本の五平餅とお菓子を手渡しました。子どもたちはけん玉がなかなか難しく、成功するまで夢中になって遊んでいました。
17:00～18:45	夕食では、トッカルビやたくさんのパンチャンをいただきました。どれも大変おいしかったです。私は黒豆が日本と同じ味付けだったことに驚きました。また、食後にはたくさんのミカンとお菓子をいただきました。子どもたちがお菓子のたい焼きが好きだそうで、喜んで食べていました。
19:00～19:40	お母さんがオーナーを務めるカフェにお母さんと子ども2人とともに移動し

て、お茶をしました。子どもたちはここでもけん玉を楽しんでいました。

所感

まず、韓国の方のおもてなしの気持ちをたくさんいただきました。きっと準備が大変だっただろうと想像するほどのたくさんの料理を用意していただきました。それにも関わらず「残していいですよ。」と何度も言われました。私たちは残さない文化ですが、こちらには残す文化があるのだと実感しました。

お母さんとのお話の中で教育や教員に関することとお話しました。2人の子どもたちは現在の小学校に転校したそうで、IB教育だから転校させたとのことでした。また、今回のホームビジットの受入れについて、ご両親はあまり乗り気ではなかったが子どもたちがやりたいと言ったので、やる気になったとのことでした。子どもたちの良い経験になることはしてあげたいとの思いからということでした。子どもたちの学習環境として教員の立場が弱いことについても心配されており、教育に熱心な様子が伺えました。

子どもたちは私たちとの関わりを楽しんでおり、帰りがけはとても名残惜しそうにしていました。私たちは韓国の文化を学ぶ良い経験をさせていただきましたが、私たちからも良い経験を提供できていたら良いなと思いました。

【A グループ】 小学校の児童のご自宅③

活動内容

16:45	小学校2年生の児童が初めてお客さんに対してお茶をふるまうとのことで、一生懸命お茶を淹れてくれました。お代わりがほしいですか？と何度も聞いてくれたので、何度もお代わりしました。
17:30~19:30	お母さんにたくさんの家庭料理をふるまっていただきました。サムギョプサルやポッサム、キンパやチャプチェ、ヤンニョムチキンなど、すべて私が大好きな料理が並んでおり、済州ビールもごちそうになりました。
19:30~20:00	たくさんの料理をいただいた後、色々なフルーツもいただきました。名残惜しいお別れの際には、フェイスパックに韓国のり、お菓子などたくさんのお土産をいただきました。

所感

韓国の方のおもてなしの気持ちには毎度感銘を受けます。その準備時間を想像しただけでも感謝の気持ちでいっぱいになりますが、料理も本当においしくてプログラム中で一番多く料理を食べた時間でした。それにも関わらず完食できなかったことが悔しかったです。日本の残さない文化とは異なり、「相手が食べ物を残した＝食べきれないほど満足した」という考えは理解していたのですが、申し訳ない気持ちがあふれるところも異文化の面白さだと感じました。

日本語と英語でのコミュニケーションは難しいとのことだったので、私は拙い韓国語と翻訳アプリで意思疎通を図りました。言葉の壁があるにもかかわらず、ホームビジットを快く受け入れてくださり、

懐の広さに感激しました。私自身は自分がホームビジットを受け入れることを全く想像したこともなかったですが、今回のホストファミリーのおかげで韓国に限らずホームビジットの受入れ機会がありましたら、ぜひ引き受けたいとマインドセットが変わる経験ができました。

【A グループ】 小学校の児童のご自宅④

活動内容

17:10	おすすめの焼き肉店に到着 ・食べきれないほどの黒豚肉を使用したサムギョプサルをいただいた。 ・濟州ビールや濟州焼酎などもとても美味しく、会話が盛り上がった。 ・韓国と日本の教育事情の違いについて話をした。韓国は日本以上に少子化が進んでいるため、教育費に多くの予算を投入しているとのことだった。良い取組であると感じているとのことだった。日本の掃除や給食当番の文化は良いと感じている。
19:00	父親が経営するカフェに移動 美味しいコーヒーが売りのカフェで、さわやかな香りのするアップルマンゴーのコーヒー豆を焙煎していただいた。
19:30	お土産を渡した。

所感

初めは、言葉が通じるか不安な状況で3時間もホームビジットをすることにとっても不安を感じていました。また、訪問宅は3世代同居家族ということで韓日の歴史的背景では、どのように感じているのだろうかという不安もありました。しかし、そんな不安は出会ってから数十分後には全く感じられないほどに温かいご家庭だということに安堵しました。何より、恥ずかしがり屋のお子さんが最後には打ち解けてくれてハグをして別れを惜しんでくれたことに感動しました。

お母さまと、翻訳アプリを使いながら話す機会がたくさんありました。同じ子どもを持つ親として、子どもの幸せを願っていること、子育ての葛藤など生まれた国は違っても共感できる部分がたくさんありました。

そして、訪問した小学校のように国際交流を盛んに行っている学校で学べることは、児童にとっても広い視野で世界を見つめることができる素晴らしい環境だと思いました。

わずか3時間の滞在でしたが、時間の長さでは計り知れない充実した貴重な時間となりました。私も韓国語が少しでも話せるように勉強し、いつかまたこの地を訪れて再会できる日がくればと願っています。ホームビジットを受け入れてくれたことにとっても感謝の気持ちでいっぱいです。



【Bグループ】 小学校の児童のご自宅①

活動内容

16:40～17:20	日本のお土産を Aさんと Bさんに渡しました。Aさんにはポケモンのけん玉とレゴを、Bさんにはねりけしとサンリオのシールを渡しました。お母さんが夕食を用意してくださっている間、けん玉を教えてあげたり、韓国の小学生の間で流行っているイタリアンブレインロットを教えてもらったりしました。
17:20～19:40	夕食としてテイクアウトしてくださった定番韓国料理のキンパ、豚足、ポッサム、フライドチキン、ヤンニョムチキンとお母さんが海で採ってきたウニを使ったウニわかめスープをいただきました。ホームビジットを受け入れるのは初めてで、Aさんと Bさんにとって良い経験になると思って受け入れてくださったようでした。

所感①

ホームビジットを通して、韓国の一般家庭の様子や小学生の放課後の家庭での過ごし方を知ることができたのはもちろんですが、特に印象に残っているのは、児童のお母さんのお話から伺えた韓国の方々の学びに向かう姿勢です。お母さんは航空会社で勤めていたそうです。その当時は済州島に来る外国人観光客は日本人が圧倒的に多かったため、日本語学校に5年間通って日本語検定1級を取得したそうです。また、航空会社に勤めた後は現在まで不動産会社に勤めており、子育てをしながら3か月で宅地建物取引士の資格を取得したそうです。なぜそんなに勉強熱心なのか尋ねたところ、「したいことだから」という回答が返ってきました。したいことに対する情熱と、一度やると決めたことに対する集中力や粘り強さに感銘を受けました。

また、韓国の子育て支援について教えてくださる中で、お母さんが「昔の日本の問題は今の韓国の問題。今の日本の問題は近い将来の韓国の問題になる」とおっしゃっており、日本と韓国が抱える社会的・教育的問題は近いものがあるのだということが分かりました。

所感②

ホームビジットを通して、韓国のキャリア意識の高さとその背景にある、韓国社会について考えさせられました。お母さんはCAから不動産業に転身し、日本語や宅建の資格を取得しており、強い向上心が伺えました。子どもを生後3か月で保育園に預けて、資格の勉強に励み、キャリアを築く姿から、韓国の学歴主義社会や雇用の不安定さ等の社会の現状、子どもたちに良い教育を届けるために、経済的に豊かでないといけない、という親の責任感を感じました。

また、来客中にもかかわらず宿題をしない子どもに注意をする場面には、日本とは異なる感情表現の文化を感じました。日本では場の空気を重んじ、感情を抑える傾向がありますが、韓国では率直な表現が重視されているように感じました。こうした文化的背景の違いを身をもって感じる事ができる、大変有意義な時間でした。

【B グループ】 小学校の児童のご自宅②

活動内容

16:30～18:00	濟州で有名なサンナクチ、アワビの刺身、コギククスをいただきました。
18:00～19:00	スターバックスに移動し、濟州限定のドリンクをいただきました。
19:00～20:00	ご自宅にお邪魔させていただきました。濟州島ではハルラ山が見えなくなってしまうという理由で15階建て以上の建物は建ててはいけないというルールがあるようでした。韓国では家族をととても大切にす文化があり、家の中にはたくさん家族写真が飾られていました。

所感

訪問先のお母様が日本人であったため、①韓国の家庭について、②学校についての主に2点のお話を伺いました。

①韓国の家庭、文化について

韓国では正月よりも旧正月を大切にします。そのため、元旦は初日の出を見に行く程度で、2日からは学校や仕事があります。また、卒業式が1月7日前後にあり、これが終わってから冬休みとなるため、日本に帰るタイミングが難しいようです。旧正月には親戚一同が家に集まり、食事を共にします。韓国には、食事をたくさん用意することでもてなしの気持ちを表す文化があるため、10合炊きの大きな炊飯器がありました。

②学校について

韓国では、大学受験以外の受験は基本的にありませんが、小学校の高学年から塾に通うことが多いようです。理由は、進学校と呼ばれる普通科の高校に入るためです。受験はありませんが、高校進学の際にある程度の学力がないと普通科の高校には進学できず、商業、工業、農業などの専門高校へ進学することになります。また、学力が高くて希望する学校に入れるかは運次第で、1つの進学校に優秀な生徒ばかりが集まらないように、生徒の学力の偏りが少ないように学校を振り分けるようでした。

【B グループ】 小学校の児童のご自宅③

活動内容

・夕食（スペアリブ店）

受け入れ家族3名（児童・父・母）と訪問教員3名で夕食をとりました。韓国と日本がお互いにとどのようなイメージを持っているか、子どもの教育をどのように考えるか、お互いの家族構成などについて交流しました。

・軽食購入（パン屋）

・家庭訪問

土産物を渡しながら、日本のことを伝えました。日本のお菓子について説明をしたり、近畿地方のことを遊んで学べる本を通して交流したりしました。さらに、簡易的なお茶会も行いました。

所感

韓国の教育観は厳しいイメージがあったが、子どもの意見を尊重し自由に育てると話されていたので、教育に対する価値観も家庭により、様々であると学びました。

大阪で開催している万国博覧会について話したが、このご家庭では知られていない様子でした。知られていることだと考えていましたが、日本人でも、他国で開催している場合の話題性は高いわけではないということを感じました。

「日本と韓国のどちらも少子化が大きな問題である」と話されていたことから、少子化は韓国でも危機感を持たれていることを学びました。家のつくりについても話題に上がりましたが、あまり差はないという結論になりました。



7月18日(金) グループ間共有セッション

活動内容

【目的】

参加者がお互いのアクションプランをより良い形で実現することに向けて情報共有し、今後の実践に活かすことを目的としています。

【内容】

①アクションプランに基づく問いの作成を行いました。

②情報共有セッション

グループごとに、問いに関する情報や気づきを共有します。セッションは、AグループとBグループ内の小グループ同士で行い、計3回のセッションを実施しました。

③振り返り

以下の質問について、クラウド上で回答しました。

- ・得ることができて特にありがたかった情報は何か。
- ・「主体的・対話的で深い学び」を通して、充実した時間にするために工夫・実践したことは何か。
- ・その他、気づき、感想など

所感

セッション①

集まったグループには、兵庫県や広島県の先生方がおり、「平和学習」をテーマに話し合いました。また、先日訪れた4・3記念館についても交えながら、平和学習の意義や防災も含めた各地域の強み（兵庫や東北は地震、広島や長崎は原爆など各地域で経験したことを踏まえた強み）を共有することが大切であると話し合うことができました。環境問題に関しては、地球全体の規模であるため、他国と連携しながら話し合いを行うことができるという話も出ました。

セッション②

韓国など他国との交流をしている学校に勤務している先生方が多く、どのような交流を行っているのか紹介し合い、より良い交流にするためにはどんなことを実施すると良いのか話しました。交流事例では、同じ学科を有する学校同士で、実地研修を用いた交流活動を行っていることが挙げられました。また、ホームステイやバディに関する事など交流に関する様々なことについて話し合うことができました。

セッション③

4・3事件に関するクイズを学校で行いたいと考えているという話を基に方法や内容、クイズへの流れなど意見を出し合いました。また、戦争に関することを後世にどのように伝えていくのか、教育ではどのようなことができるのかについて話し合いました。

道徳での「国際理解」や「国際親善」に関してどのような授業実践をしているのかという質問が出さ

れ、「知ること」が「国際理解」につながるということや自国のことを学んでから交流を行う、相手をマイナスに捉えるのではなく自分たちの特徴を生かすことなど様々な案が挙げられました。



日韓教師対話 25 周年記念フォーラム

7月18日(金)

活動内容

14:00～14:05	歓迎挨拶
14:05～14:30	日韓教師対話 25 年を振り返る (KNCU・ACCU)
14:30～15:00	「協力と連帯で進展する日韓教育共同体」(KNCU)
15:00～15:30	「何を越え、いかに協力し連帯するか」(過去のプログラム参加者)
15:50～17:00	優秀事例の紹介 (教職員 4 名)
17:00～17:20	4 名の発表者によるパネルディスカッション
17:20～17:50	経験・計画の共有 「日韓の教職員が分かち合う協力と連帯の教育」というテーマで、テーブルごとに参加者間の協議が行われました。
17:50～18:00	記念写真撮影
19:00～20:30	日韓教職員交流夕食会

所感

この度、プログラム全体を通して多くの貴重な学びと出会いがありました。本フォーラムでは、25 年間にわたって継続されてきたこのプログラムの歩みと意義について、多くの先生方からお話を伺うことができました。

とりわけ印象的だったのは、日韓両国の教員が長年にわたり、教育現場での実践や交流を積み重ねてきたことです。学校現場での具体的な交流活動の紹介からは、互いの文化や価値観を尊重しながら児童・生徒の学びを深めてきた工夫と努力が伝わってきました。また、国や言語の壁を越え、教育を通じて人と人とのつながりを築いてきた教職員同士の協力と連帯の強さにも心を打たれました。

中でも特に盛り上がったのは、テーブルごとに分かれて韓国の教職員と日本の教職員が両国の教育課

題について協議したセッションです。教育現場で直面している共通の課題やそれぞれの国での取組、異なる価値観について率直に語り合うことで、新たな気づきや視点を得ることができました。議論は通訳を交えて活発に行われ、言葉を超えて教育にかける思いが共有されたことは、大変貴重な経験となりました。個人的に本プログラムで最も印象に残っている時間の一つです。

今回の交流を通じて、異なる背景を持つ教育者同士が対話を重ね、理解を深めることの重要性を改めて実感しました。ACCUの発表で言及されていた、自分の共同体を出て「出会う」ことによって自己が変化するという経験を実感できたフォーラムとなりました。国際社会に生きる次世代を育てる教育者として私自身もこれからの教育実践において、違いを受け入れる柔軟さ、ポジティブ思考で何事にもチャレンジする姿勢を大切にしていきたいと強く感じています。

本プログラムに参加できたことを光栄に思うとともに、今後も日韓の教育交流の一助となるよう努めてまいります。

7月19日(土)

活動内容

9:00～9:10	開式・説明等
9:10～10:00	日本教職員間でのフォローアップアクションプランの共有及び日韓教員の共同活動に関する協力の議論
10:10～10:20	感想の発表
10:30～10:40	感謝の踊り

所感①

様々な日本の教員や韓国の教員とのつながりを持つことができました。校種や立場、担当教科の異なる先生方との交流を通じて多くの学びがあり、様々な視点や各校での実践を知ることができました。今後は日本国内での横のつながりも大切にし、韓国教員との継続的交流も継続的に行っていきたいと思います。今回の交流会などを通じて、韓国の方々にとっても親切にさせていただきました。もし韓国の先生方が日本を訪れる機会があれば、同じように心を込めておもてなしをしたいと思います。

所感②

アクションプランの達成のために、可能な限り具体的なアイデアについて話す時間でした。例えば、オンラインで交流するにしても、どのような計画で行うのかなど、いくつかの事例を基に実践する方法を交流から学ぶことができました。私の場合は、有志の生徒を募り、日本2人と韓国2人の4人グループをつくり、4回に分けて1時間ずつの交流を行い、テーマに基づき相互発表し合う形式に関心を持ちました。実現のハードルが低い点と、生徒と生徒が友だちになるくらいまで交流を重ねられる点で良いと感じました。

日韓の代表教職員の感想の発表では、このプログラムの振り返りやこれからの心がけなどを話されていました。このプログラムで得たことを活かしていかなければいけないということを改めて感じることができました。



7月20日(日) アクションプランの発表・閉会式

活動内容

9:00～9:30	アクションプランの発表 グループに分かれて、アクションプランと韓国の先生方から得た情報やこれからの授業で活用できそうな情報を共有しました。
9:30～10:00	済州で一番記憶に残っていることの発表 グループに分かれて共有しました。
10:00～10:50	プログラムの感想発表 感謝の踊り

所感①

最終日ということもあり、1週間でインプットしたことを思い出とともに振り返りながら自分の言葉でアウトプットすることで、得た情報を自分の知識として落とし込む良い機会になりました。それと同時に、この知識（理論）を実践につなげることが重要だと改めて感じました。日韓教師対話 25周年記念教師フォーラムや最終日のフォローアップアクションプランの発表を通して、最初は抽象的だったアクションプランも次第にブラッシュアップされ、より具体化・具象化していることに気付きました。全ての参加者が Change Makers としての役割を果たそうとしていることが分かった瞬間でもありました。

また、最後の閉会式では、多くの方々の挨拶に「人と人とのつながり」という言葉が出てきました。私自身もそれを実感・体感した1週間でした。人との出会いから学ぶことが多くあり、国は違えど志を同じくする者同士が対話を重ねることで、国際交流や国際理解の礎を築くことができるのだと思いました。まさに、このプログラムのテーマでもある「幸せな学校：みんなで作る教育共同体」というのを身に染みて感じることができました。このようなプログラムに参加する機会をいただき、大変光栄でした。本プログラムで出会った全ての方々に心から感謝申し上げます。

所感②

訪れた先々で温かく迎えていただき、多くの学びを得ることができました。このような貴重な経験を通

して、感謝の気持ちで胸がいっぱいです。教育への情熱や、国際交流の機会を児童・生徒たちに届けたいという思いが通じ合ったからこそ、実りある交流が生まれ、深い学びにつながったのだと感じています。

また、日本の教職員同士の交流も非常に意義深いものでした。同じ体験を共有し、感想を語り合う中で、自分自身の思いや考えが整理され、新たな視点を得ることができました。地域や校種の違いを感じながらも、お互いの良さを認め合い、取り入れ、今後つながりを大切にしていきたいと思います。

人と人をつなぐ仕事には、多くの苦労や努力が伴いますが、それに見合うだけの価値あるつながりが得られることを今回の経験を通して実感しました。今後は、今回いただいたご縁をもとに新たなつながりを築いていけるよう働きかけていきたいと考えています。



サムスン女子高等学校でのお茶を通じた文化交流



済州多文化教育センターの見学



サムスン女子高等学校での授業見学



城山日出峰の視察

3. 参加者の声

プログラム参加後に参加者から寄せられた声を一部編集・抜粋して掲載します。

プログラムに参加した感想

とにかく勉強になりました！1. 知識だけで知っていたことを自分の目で確認できたこと。2. 韓国の先生方と交流ができたこと。3. 日本全国に友達ができ、参考になる取組をたくさん知ることができたこと。違いにばかり目が行ってしまいがちですが、同じ悩みを抱えているということも認識できました。同じ思いをつないで繋がっていくことも大切だと思うようになりました。

今回の韓国派遣プログラムを通して、教育の可能性を広げる多くの気づきを得ることができました。特に印象に残ったのは、「出会い」という言葉です。「出て」、「会う」と書くこの言葉のように、私自身が外に出て体験し、それを生徒に伝えることで、彼らに新たな世界との“出会い”を届けたいと強く感じました。済州島での学校訪問や文化交流、ホームビジットでの温かいおもてなしなど、心に残る場面がたくさんありました。今後は、韓国の文化や学校生活を紹介する授業を通して、子どもたちに異文化への興味と理解を育んでいきたいと思います。

狭いコミュニティ、決められた教育活動の中で職務をこなしていました。しかし、このプログラムに参加し、国内外の教育関係の方々とつながることにより、視界が開けた気持ちになりました。外国はもちろんのこと、県外との関わりも乏しい子ども達の世界に国際交流という種をまきたいと心から思いました。

まさに教師人生を変える一週間でした。これまでの価値観を揺さぶられ、自分の中の「当たり前」が大きく書き換えられるのを感じました。まず、韓国の学校現場を訪れた際、教職員の皆さんの教育にかける情熱の熱量に圧倒されました。同時に、参加者の熱意も圧倒的で、文化や制度の違いを超えて「教育の本質」は世界共通なのだと実感し、胸が熱くなりました。一方で、違いに気づく度に、自分の指導法や教室づくりを振り返らずにはいられませんでした。私はいつの間にか制度や慣習に縛られ、「変えられないもの」と思い込んでいた部分があったのです。しかし、韓国の先生方が限られた条件の中でも創意工夫を凝らして教育に取り組んでいる姿を見て「自分にもまだできることがある」、「挑戦する勇気を持とう」と心から思えました。また、他地域から集まった日本の参加者との語らいの中でも、多くの学びと気づきがありました。異なる現場、しかし似た悩みを持つ仲間たちと率直に意見を交わす中で、自分の視野の狭さを思い知るとともに、「この人たちとなら、未来の教育をもっと良くできる」と強く感じるすることができました。個人としても、このプログラムでの出会いや体験を通して、人との関わり方、他者へのまなざしが変わりました。言葉の壁があっても、心は通じる。そう確信できた瞬間でした。このプログラムに参加して以来、私の中には「教員として本当に大切にすべきものは何か」という問いが根づいています。そしてそれは、これからの教員人生を進んでいくための、大切な羅針盤になっています。この貴重な機会をくださった

すべての方々に心から感謝申し上げます。これからは、私自身がこの経験を現場で還元し、次の世代へとつなげていく役目を担っていくことを誓います。

コネクションが拡大できました。普段関わることのない、同じパッションをもった全国、世界の先生とつながることができました。そこから知らなかった方法や引き出しを学びました。参加したことで自身を見つめ直すことができ、さらにこの学びを生徒や同僚に教えることができ、将来の交流へ可能性が見えてきました。自分が何をすべきかということも見えてきました。参加して良かったとしか言えません。このようなチャンスをいただき、ありがとうございました。すごく良くしていただいたので、もし韓国から先生方が来られる際には、してもらったように、今度は私がたくさんのことをしてあげたいです。今まで25年間、先輩方が繋いできたバトンをこれからも繋ぎ続けたいです。

「人と人とのつながり」を実感・体感した一週間だった。「国際交流」や「国際理解」と聞くと、国境を越えて実現しなければならないため、壮大なスケールでハードルの高いものだというイメージを抱いてしまっていた。しかし、志を同じくする者同士が対話を重ねることで、国際交流や国際理解の礎を築くことができるのだと実感した。そして、その国のことを理解するには五感で体験することが重要であると思うが、それだけではなく、人と人がつながって初めて国際理解・国際交流が成立するのだと感じた。未来の人材を育成する者として、教員自身が学び続け、あらゆる知識や技能をアップデート及びアップグレードすることが重要であると思うが、このプログラムはその良い機会となった。多くの学びをインプットとして得られたため、勤務校の生徒や教職員にアウトプットし、その学びを深め広げていこうと思う。そして、異文化理解教育に役立てるのはもちろんのこと、県内の高等学校における国際協働の先駆けとなれるような取組を継続していこうと気持ちを新たにした。このようなプログラムに参加する機会をいただいたことに心から感謝したい。



日韓教師対話 25 周年記念教師フォーラム



韓国の教育について新たに学んだこと

各学校によって、カリキュラムなどで「独自性」を重要視しているということがわかりました。また、校内の環境（学習環境や校内施設、教員の職場環境）についても非常に大切にしているということがわかりました。

日韓教師対話フォーラムで韓国の先生方と現在抱えている課題を話した際に、「教師になりたい人が減っている」、「教育予算の問題」、「教師主体で進めるとうまくいかない」など多くの点で共通の課題があると感じました。韓国の校長先生と話した際、「教員を辞めたいと思ったことがないか」という話題になり、「辞めたいと思ったこともあったが解決すべき課題に1つ1つ取り組んでいたら、もうすぐ定年を迎えます。奇跡のようなことです。」と話してくださいました。教育に向ける熱い思いを感じることができました。また、「勉強ができてでも全てがうまくいくわけではない。自分を尊重することが大切。」と話してください、日本も韓国も学歴社会であるが、心のケアや勉強面以外で生活を充実させることも重要であると感じました。現在勤務している高校では各教科で宿題を生徒に課していますが、韓国の高校（フォーラムで意見交流した男子高校）では宿題がほとんどなく、授業で完結するようにしているということで、放課後塾に通ったり、クラブ活動をしている日本の学生の実態を考えると、宿題の在り方についても改めて考えさせられました。

韓国の進路職業体験センターの取組は非常に印象的でした。特に注目すべき点は、生徒の適性に基づいた職業選択の支援が体系的に行われていることです。日本では進路指導が学習や進学に重きが置かれがちですが、韓国では「勉強と就職をどうつなげるか」という視点が明確であり、実践的です。センターでは、生徒一人ひとりが自己理解を深めた上で、多様な職種に触れられるよう設計されており、シミュレーション型の体験や面談が充実していました。さらに驚いたのは、こうしたキャリア教育に国家レベルで多額予算が投じられている点です。教育の中で「職業」や「将来」をリアルに考えさせるための投資がしっかりなされており、生徒のモチベーションや将来設計の具体性にもつながっていると感じました。

倫理や教育学を修得した道徳科教員がおり、1年生の1学期では週2時間、2学期では週3時間の道徳授業があるということを知った。カウンセリングルームの充実度や、カウンセラー常駐といった制度も含め、メンタル面のケアや道徳心といった内面の成長に力を入れていることを学んだ。

プログラムの中で最も記憶に残った瞬間

私が最も印象に残っているのは、ポモク小学校での文化授業です。ポモク小学校では日本の遊び（独楽・福笑い・けん玉・折り紙）をしましたが、海外の遊びに目を輝かせ、うまくいけば喜び、失敗すると悔しそうにし、なぜ失敗したのかを考え、何度もチャレンジをしていました。児童・生徒の興味関心に、国境はないと感じた瞬間でした。

海外の先生とフラットに、対話したことです。国と国ではなくてただ 1 人の個人の先生方がつながる瞬間でした。様々な背景をもった先生方と美味しい食事をしながら、たくさん笑い、語りました。そして韓国の先生が来年会いに日本に来るという約束をしてくれました。「偶然を必然に」という講演の言葉がぴったりで、想いが溢れてしまいました。

文化授業です。特にポモク小学校での授業では、様々な先生と協力し、楽しく授業することができました。やり切った後、子どもも大人も笑顔で撮った集合写真は宝物です。

一つに絞るのは難しいですが、ホームビジットで訪れた先のお子さんとの交流が心に残っています。私はごくごく簡単な韓国語と英語しか話せません。一方、子どもたちはまだ 5 歳くらいで韓国語しか話せません。その中で、身振り手振りでやり取りをし、一緒に折り紙を折りました。言語を介さなくても交流したいという思いがあれば交流できるものだなと嬉しく思いました。

4.3 平和祈念館の白碑が最も印象的であった。この事件についての知識が全くなく、この記念館訪問が知るきっかけとなった。目の前にあった白く冷たく見える白碑から、語ることが許されなかった歴史の悲しみや苦しみ、名前を付けられないという現実の重さや難しさを感じる事ができた。この白碑が、今も印象に残っている。



サムスン女子高等学校での学校給食

参加者がプログラム参加後に作成したアクションプランは、ACCU ウェブサイトに掲載しています。以下の QR コードからぜひご覧ください。



4. プログラム参加後の取組

プログラム参加から約4か月後、参加者を対象にその後の取組に関するアンケート調査を実施しました。本章では、参加者の取組の一部を編集・抜粋して紹介します。

また、本アンケートの結果、プログラムの成果はアンケート締切日の2025年11月14日までに、延べ15,330名へ発信されていたことが分かりました。内訳は、児童・生徒14,072名、教職員1,023名、その他（地域住民・知人等）235名でした。

教職員及び児童・生徒への成果共有

対象者	市内小・中学校長、市教育委員会
対象人数	26名
具体的な活動	四国中央市校長会にて報告した。本プログラムの活動報告を画像や動画を活用しながらプレゼンテーションした。四国中央市校長会として、国際交流の在り方等について協議した。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	今後、グローバルな視点で学校教育を見直すとともに、韓国をはじめ様々な国と学校間交流を行いたいという意見が多かった。本研修の様子がコスモステレビで放映され、市内での反響があった。研修の様子はYouTubeで視聴可能。

対象者	小学校1年生～中学校3年生
対象人数	1536名
具体的な活動	始業式において、「先生の夏休み」という題名で、全校生徒に向けて韓国派遣プログラムの話を行った。まずは、韓国について紹介し、次に済州島に関するクイズを3問行った。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	始業式の後、児童・生徒と廊下ですれ違うときや、教室を訪問したときに「始業式の話おもしろかった!」、「韓国行って来たんやんな〜!」と話しかけてくる児童・生徒が多くいた。教職員からも、「韓国のクイズ、子どもたち楽しんで聞いていました。」との声をいただいた。その後、教職員向けの韓国派遣プログラム報告会、3年生向けの授業を企画し、実行した。

対象者	県内の養護教諭
対象人数	60名
具体的な活動	長野県内の養護教諭を対象に、研修報告及び実施したアンケート調査の報告をした。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	「他国の学校保健を知る貴重な機会だった」、「校外で養護教諭が参加できる研修があることを初めて知った」などの感想が寄せられた。今後の研修への参加意欲向上にもつながったと考える。

授業内での実践

対象者	中学校3年生
対象人数	37名
具体的な活動	韓国派遣プログラムで得たことや見たものをスライドにして授業内で発表しました。沖縄と似ている街並みや気候、土地柄など生徒が興味を持つように写真をメインにして作成しました。また、派遣プログラムで訪れた高校や小学校の様子を見てもらい、自分たちの学校と比較し、考える機会にしました。刺激を受けたこと、衝撃だったこと、楽しかったことを写真とともに伝えました。この派遣プログラムに参加して学んだ「出会い（共同体を出て、自分とは異なる他者と会う）」、「大人になっても学び続けるチャンスは自分で掴み取る姿勢」を生徒へ伝えていきました。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	街並みや韓国の学校の様子、生徒の様子など授業後に何人もの生徒が質問に来てくれ、韓国派遣プログラムに興味を示していました。

対象者	高校1年生
対象人数	40名
具体的な活動	お土産のお菓子を配布し、プレゼンテーションを行った。今回の派遣の目的、意義について説明。今回、私自身が学んできたことについて報告した。（IB教育について、反日でない韓国の平和教育について、日本国内における平和教育について、その他（小学校・高校の状況、学校間交流における課題、海女、キャリア教育、日韓教員間交流、家庭訪問等））
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	生徒の感想アンケートでは、「実際に見て学ぶことの大切さを感じました」、「異文化に触れる意義を実感しました」、「新しい価値観に触れる意

の後の進展など	義を実感しました」、「現地の人との交流が心に残りました」、「自分も海外で学んでみたいと思いました」、「国際的な視野を広げたいと思いました」、「学び続ける姿勢が素晴らしいと思いました」、「韓国の学校の雰囲気がよく伝わりました」、「平和について常に考えていくべきことだと学びました」、「海外の教育に興味を持ちました」といった回答が寄せられた。生徒の一人が、韓国での教育に興味を示し、長野県が独自に実施している海外研修に応募し見事合格し、先月1週間、長野県訪問団の一員として韓国研修に参加した。
---------	--

学校間交流

対象者	四国中央市立中之庄小学校 5年生
対象人数	70名
具体的な活動	韓国のマンデ小学校と3回のオンライン合同授業を行うことになり、9月16日に1回目を実施した。互いの学校の様子を紹介し合うとともに、日本と韓国の文化の違い等について質問し合った。10月14日は、マンデ小学校の先生が授業者となり、韓国のボンサンタルというお面づくりを行った。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	初めての交流授業であったが、日本語や韓国語で挨拶や質問をし、楽しく交流することができた。2回目、3回目は図画工作科の授業を同時に行うこととなった。YouTubeでも紹介されており、韓国と共有している。両国の児童が個性的な作品を制作し、互いに鑑賞し合うことで、良さを認め合い親近感をもって合同授業をすることができた。

対象者	龍野東中学校 特別支援学級 1～3年生
対象人数	6名
具体的な活動	韓国派遣プログラムで紹介された、ソウル市の交流授業プログラムにエントリーした。9月18日に事前にオンラインで生徒さん3名と対面して、翻訳機を使った会話をした。その後、初回は自己紹介をすることに決め、10月1日に各自スライドを使用した自己紹介を行った。龍野東中学校側は、教師2名と、生徒6名が参加した。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	・青雲中学校とのオンライン交流は、済州島への派遣がきっかけで始まったが、済州島訪問後の疑問として残っていた韓国の特別支援教育への疑問を一つ一つ解消してくれるものとなっている。相手校の先生とは、

	<p>事前の打ち合わせを含めて、今のところ3日に1回くらいのペースでお互いの学校や教育の現状についてメールで情報交換を行っている。お互いに、自分の関係する生徒に学校の外の世界と触れあう機会を提供したい、特別な体験をさせたいという思いが共通しており、今後の授業も楽しみである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2回目の授業は、学校紹介、3回目の授業はじゃんけん大会を行った。今後、Web上にクラスルームのようなものを使って、授業後の感想やちょっとした会話を文字や画像で交換できればと話し合っている ・11月13日、相手校の先生が来日。龍野東中学校に来校し、特別支援学級、交流学級の授業を見学され、龍野東中学校の特別支援部と思いがけない韓日教師対話の時間が持てた。日本の教育を多面的に見る機会を提供できていたら、嬉しい。
--	--

対象者	長野県長野吉田高等学校1～2年生
対象人数	16名
具体的な活動	両国の教科書を送り合い意見交換をする日韓歴史教科書プロジェクトを実施。相手校は、済州島のIB校ピョソン高校。この日は、オンラインフレンドトークと称して、友好関係を築くために、学校紹介や自己紹介を行った。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	<ul style="list-style-type: none"> ・高校2年生「今後の学習で韓国の人の考えを受け止め、日本の問題にもフォーカスしたい」 ・信濃毎日新聞に掲載された。 ・次の交流会に向けて、学習会・校内新聞作成に取り組んでいる。

対象者	愛知県立丹羽高等学校3年生
対象人数	12名
具体的な活動	韓国の高敞北高校1・2年生と本校の3年生がオンライン交流を実施。生徒には各自パワーポイントで自己紹介をしてもらい、担当教員による学校紹介を実施。また残りの時間でフリートークを楽しみました。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	次回の交流が楽しみになったという声が多数あった。

地域への成果普及

対象者	地域の子ども及び大人
対象人数	40名
具体的な活動	子ども食堂「子ども大人元気食堂」の夏休み企画「高校生チャレンジ食堂」で、私の韓国（済州島）体験談から米粉チヂミとわかめスープを提供することになりました。地元野菜と韓国産のわかめ・調味料にこだわり高校生と調理しました。老若男女40名が参加し、「レシピを知りたい」、「済州島へ行きたい」と大好評。旅ログ発表では済州島の歴史にも触れ、参加者と隣り合う国との「平和」について対話する貴重な機会となりました。
対象者（参加者）からの感想・その後の進展など	<ul style="list-style-type: none"> ・ワカメスープやチヂミの作り方を聞かれた。 ・お客様の中には済州島に行ってみたいという声が多く寄せられた。 ・子ども食堂の調理を高校生と実施できた。



ポモク小学校での日本教職員による文化授業と学校給食



済州 4.3 平和記念館での質疑応答



5. 資料編

参加者情報

参加者の所属校

四国中央市立中之庄小学校	上越市立八千浦中学校
奈良市立一条高等学校附属中学校	松本市立明善中学校
沖縄市立美里中学校	倉敷市立万寿小学校
長野県野沢北高等学校	明石市立朝霧中学校
たつの市立龍野東中学校	江田島市立大柿中学校
長野県上田染谷丘高等学校	田辺市立本宮中学校
久喜市立鷲宮東中学校	北海道倶知安高等学校
宮城県立光明支援学校	橿原市立晩成小学校
日野市立日野第七小学校	板橋区立緑小学校
長野県上田高等学校	長崎県立西陵高等学校
関西学院大学千里国際中等部高等部	石垣市立登野城小学校
八千代市立みどりが丘小学校	宮城県西都市立穂北小学校
新潟県村上市立岩船小学校	長野県長野吉田高等学校
埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校	鹿児島修学館中学校・高等学校
佼成学園女子中学高等学校	佐渡市立南佐渡中学校
浪速高等学校	長野県小諸高等学校
大阪府立泉北高等支援学校	東京科学大学附属科学技術高等学校
群馬県立尾瀬高等学校	田辺市立上芳養中学校
北海道美瑛町立美瑛小学校	宮城県塩釜高等学校
東大阪市立上小阪小学校	大東市立大東中学校
愛知県立丹羽高等学校	唐津市立浜崎小学校
愛知県立加茂丘高等学校	兵庫県立農業高等学校
日本体育大学柏高等学校	愛媛県立北条高等学校
町田市立小山小学校	小平市立小平第五小学校
箕面市立彩都の丘学園	千葉県立松戸国際高等学校
板橋区立中台小学校	中央区立佃島小学校
北海道八雲町立東野小学校	出水市立出水商業高等学校
苫小牧市立ウトナイ小学校	大阪府立鶴見商業高等学校

参加者の校種

高等学校	19名
中学校	11名
中高一貫校	3名
小学校	18名
小中一貫校	1名
特別支援学校	4名

参加者の役職

校長	4名
教頭	0名
主幹教諭	1名
主任教諭	3名
指導教諭	1名
教諭	45名
養護教諭	2名



済州融合科学研究院での体験



クムキオレ進路職業体験センターでの AI 進路相談体験

プログラム関係機関

< 日本側機関 >

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

駐大韓民国日本国大使館/Embassy of Japan in Korea

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

< 韓国側機関 >

韓国教育部/Ministry of Education, Republic of Korea

韓国ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO

< 訪問機関 >

サムスン女子高校/ Samsung Girl's High School

ピョソン高校/ Pyoseon High School

ポモク小学校/ Bomok Elementary School

インファ小学校/ Inhwa Elementary School

クムキオレ進路職業体験センター/ Kkumkiolla Career Experience Center

済州多文化教育センター/ Jeju Multicultural Education Center

西帰浦学生文化院/ Seogwipo Student Culture Center

済州融合科学研究院/ Jeju Institute of Convergence Science & Research

ユネスコ世界自然遺産「城山日出峰」/Seongsan Ilchulbong Tuff Cone , UNESCO World Natural Heritage

済州世界自然遺産センター/ Jeju World Natural Heritage Center

済州 4.3 平和記念館/ Jeju 4.3 Peace Memorial Hall

済州海女博物館/ Jeju Haenyeo Museum

**文部科学省委託 令和7年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業
韓国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書**

2026年2月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email exchange@accu.or.jp

URL <https://www.accu.or.jp>

本報告書は、文部科学省の委託事業として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが実施した「新時代の教育のための国際協働プログラム（初等中等教職員国際交流事業）」委託事業のうち、韓国政府日本教職員招へいプログラム（韓国派遣プログラム）の成果を取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

©2026 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)